

長山家の場合は、十町歩の田畑のうち、残されたものは、わずかに二反ほどに過ぎなかった。

信次の悲歎憔悴は目にあまるものがあつた。

「何も無くなってしもうた。こんなはずではなかつた。わしがいつたいどんな悪いことをしたというんじや。わしは、せいっぱいやってきたのに……。何という時代になつたものか。」

信次が、次第に、何かにつけて愚痴っぽく呟くようになったのは、昭和二十六年の夏も終ろうとする頃であつた。

「父さん、いつまでもよくよ言うなよ。父さんのせいじやないことは、分つとる。うちだけやないんやから……。」

圭吾がいつも信次を慰めた。

露は、今度の農地改革は、くるべきものがきたという実感で受けとめていた。あんな不平等がいつまでも続くはずはなかつたのだ。それにしても、管理しなければならぬ財産や、傷つけることを絶えず恐れて暮らした地位や名誉など、煩わしいもろもろの枷がなくなつたということは何とすがすがしいものだろうか。

露はこの日頃、何十年ぶりかをやつと自身自身の身体に戻つたような解放感を味わつていた。

このさわやかさを、できるものなら信次と二人で分かち合いたかつた。しかし、それは、殆ど

不可能に近い願ひであつた。

愚痴や焦燥や挫折感などを、もろに見せて、信次は毎日毎日、疲労の色を濃くしていった。

手をさしのべても。その手を振り離して、絶望の淵へ自ら落ちこんでいくような信次を、露も圭吾も、なすすべもなくただ見守つているばかりであつた。

しかし、露はそんな信次に、かつてない人間らしさを覚えていた。近頃のように、恥も外聞も忘れて、自身の弱さを人前にさらすなど、これまで

の信次には思いもよらないことであつた。  
ひたすらに取りすがり、それを守り抜くことを生き甲斐とさえしてきた、その対象が、無下に奪

われた今、ようやく一人の人間として、ありのままの姿を見せ始めた信次だつた。  
哀しい姿ではあつた。だが露は、そんな信次に、前にして、ふしぎないとしさが、少しずつ胸に広がつてくるのを見出していった。  
長い年月、溶けることのなかつた心の芯の凍つたものが、徐々にゆるみ始めていることに、露は安らぎに似た思いを味わつていた。

昭和二十六年の日めぐりが、あと十枚程になつた十二月のある朝であつた。  
信次を起こしにいった圭吾が只ならぬ表情で、慌しく茶の間へ引き返してきた。

「母さん、父さんが……。」

馳けつけた露は、信次の魂がすでに手の届かない遠い所へ旅立ってしまったことを知った。呼んできた医師は、脳溢血との診断を下した。

露の思考は停止した。いったい今、何が起こったのか。露は信次の頬にそっと触れてみた。まだぬくもりが残っているというのに、その頬は、両手で強くはさんでみても、何の反応も示さなかった。

これが信次との永遠の別れだというのだろうか。そんなはずはなかった。

三十年間、ことあるごとに連れ合い、絡み合いい、ぶつつかり合って相剋を重ねてきた信次と露

すべての重圧から、責任から、自責の念から解放された信次の顔に、明るい平安の色が広がっているのを……。

かたわらでむせび泣いている圭吾の、父親によく似たうなじのあたりに、乾いたまなごしを投げかけながら、露は立ち上ることを忘れていた。庭の木の梢あたりで、冬鴟がつきさすような声をひびかせている朝であった。

「母さん、僕、母さんに会ってみたい人がいるんだけど……。」

圭吾が鏡の前でネクタイを結びながら、そう言った。

であったのだ。永遠の別れならば、それなりの修羅場がなければ、露夫婦らしくなかった。死というまがましい節目を、こうもすんなり越えてしまうような信次ではなかったはずであった。

だが、逆に言えば、いつも抜きさしならない現実を突然に押しつけては、露を苦しませてきた信次らしい別れであるともいえた。

それにしても、あまりにも唐突であり、あまりにもきびしい現実ではあった。

しかし、露は見逃していた。このところ、六十歳とは思えぬ深い憔悴の色を見せていた信次の表情に、今、得もいわれぬおだやかさが漂っていることを……。

信次の一周忌を終えたばかりの、昭和二十七年の暮である。

「何よ。好きな人でもできたの？」

圭吾にハンカチを渡しながら、露は軽い気持ちで答えた。

「実はそうなんだ。役所にいる娘んだけど、母さんにまず会ってもらって、よければ結婚したいと思って……。」

露の中で、急に風がざわざわと騒いだ。

東京の大学を出て、父親と同じように県庁職員となっている圭吾である。

濃い眉の下の眼がいつも澄んだ色をたたえている圭吾を見るたびに、露は誇らしさが胸に広がる

った。

圭吾は、結婚した頃の信次と瓜二つであった。

時に射すくめるような眼の色を見せた信次と違

つて、圭吾の眼には絶えずぬくもりがあった。し

かし、後姿だけは生きうつしであった。

長身の圭吾の、うなじから背のあたりを見て

いると、やさしかった頃の信次の肌の匂いがよみ

がえった。

(圭吾に好きな人ができている…)

いつかは必ず訪れる日ではあったが、それが

今、現実となってみると、露はただうろたえた。

圭吾を送り出したあと、朝食のあと片づけに

かかりながら、露は、自分の中に騒ぎ始めた風が、

次第に強まっていくのを覚えていた。

なぜが、しきりに喜乃のことが思い出された。

絶えてなかったことであった。

あの年、喜乃が大阪へ出たあと、父親の修造

もまもなく家を畳み、娘のあとを追ったのだっ

た。律気な修造だけに、飯内村でそのまま暮らし

ていくことには耐えられなかったのである。

学徒兵として出陣した、喜乃の弟、文平が

南方戦線で戦死したことを知らせる修造の手紙

は、昭和十八年の春浅い頃、露の手もとに届い

た。だが、同じ年の冬、喜乃が三十七歳の若さ

で病死したことを、再び修造の便りで知った時

には、露は言葉を失った。

喜乃はあの後、結婚もせず、肌合わない

水商売を続けて父親を養ってきたようであっ

た。老いて一人になった修造がどのように暮ら

しているのか心にかかり、露は手紙を出したが、

それは住所不明の付箋をつけて返ってきた。

気になりつつ日を過ごしていた露に、村にいた

頃の修造と懇意であったよろず屋の主人が、

修造の死をそと耳に入れてくれた。

ガンで世を去ったという修造のことを、その

頃まだ健在であった信次に、露は遂に言わなかつ

た。

大阪へ行ってからの喜乃と信次の間が、どの

ような形で続いたのか、それとも切れたのか、露

は知らなかった。いや、知ろうとしなかった。そ

れらもろもろの重い情念に捉われないために、

露は、ひたすら圭吾の存在だけを見つめて生きて

来たのである。

だが、修造からの手紙はともかく、喜乃からの

音信が一度も届かなかったことに、露は喜乃の

並々ならぬ意地を感じとっていた。

女木島で会った日、子供はどんなことをしても

一人で育てるから渡さない、と言った喜乃の、

青白い顔と、きつと結んだ紅い唇が思い出され

た。

その喜乃から、もぎとるようにしてわが子にし

た圭吾なのである。

秋山家の悲運を思い、喜乃を思うとき、拭いよ  
うのない苛責が、露を苦しめた。だが、圭吾の  
成長して行く姿がそんな露の重荷を柔げてく  
れた。

しかし、圭吾の幼い頃は、そのうしろに立ち  
だかる喜乃の幻影に、心を昂ぶらせたこともあ  
った。けれども、今はそれもなくなった。

圭吾を育て上げた母親としての自信が、喜乃に  
対しての負い目を薄れさせたのだろうか。

圭吾にのめりこんで生きる路には、それが、一  
つの転嫁であることに思い至るゆとりはなかつ  
たようである。

圭吾がその娘、千枝を連れてきたのは、松の内  
も明けた日曜日の午後であった。

風の風いだおだやかな日である。香東川の空に、  
凧が二つ浮かんでいるのが窓越しに見えた。

露は久しぶりに和服に手を通した。戦争中か  
らの習慣のまま、この数年はずっとセーターや  
ズボンで通していた露である。

藍大島のきものに堆朱色の無地の帯をしめた。

きりと結び上げて姿見の前に立つと、忘れて  
いた女らしい情感がよみ返ってくる。

二、三本白いものの光る髪をさっぱりとときつ  
け、後髪に珊瑚の玉かんざしを飾ると、五十二歳

という年齢が少しはかくれた。

(以上4月7日放送分)